

令和3年春季号 (Vol.83)



- 古流へ結ぶ武器術 (P2)
- The Broken Telephone(P3-6)
- 中心をとるとは (P7)
- 球の原理からの考察(P8)
- 近況で得た諸々の気付き(P9)
- 昇段_Dan Grading (P10)
- 日本における投資教育(P11)

力必達

羅針盤

千歳翁の唐手門下になってから50年の年月が過ぎました。私は最近、これまでの修練過程を振り返りながら今後も長く続く空手の道をどう歩いていくかを思い描いています。その心境と言えば、大海原を航海する帆船の船影に重ねることができます。GPS (Global positioning System/全地球測位システム) 機能が備わっていなかった昔の船は、太陽・月・星座、羅針盤と海図を見て自分の位置を常に確認しながら目的地へ向け舵取りをしていました。



夷途良轡 大海安波

「夷途」とは平坦な道、「良轡」は馬の手綱 (たづな) をとる良い御者、そして「大海安波」は大きな海の波が穏やかな意味です。

これは「書・三體千字文」の始まりに出てくる格言で、「この千字文を習うならば横道にそれずに安心して書の道を進むことができる」との意味を持ちます。そのことから私は、格言が言わんとする本質を自分の空手稽古に重ね、「今私はどこにいるのだろうか……？ 目指す道から外れていないだろうか……？」と自身に問いかけ、唐手の道から外れていないかを確認するようにしています。



これは3/14の稽古誌の内容です。

『【何か変】；USAの不正大統領選の情報を追っているうちに、“三角型戦闘機TR-3B”の存在を知り、そこから「重力と反重力の量子力学」さらに以前から研究課題としている「意識と量子力学」の考察へと入りこんでいます。それは別に自分から仕掛けたわけではないのですが、何か別な力に押されているような“妙”というか“変”な感覚なのです。

“技法は、粗い→細かい→微細へと変化する”。これは私が持論とする技法概論の一つですが、今の稽古段階は、物事の本質を別な視点(角度)から捉えながら次の舞台へ上がるための過渡期なのかも知れません。しかしながら今の私は並行して世間全体に漂い始めている「何か変」の嫌な波動を感じてきています。』

稽古誌なので我が勝手の内容になっていますが、私にとってはいずれ取り組まなければならない研究テーマと決めていた“意識と量子力学 (consciousness and quantum mechanics)” という難解な素粒子論を取り入れた技法理論の考察へ向けて「一步踏み出せ」とする自分自身へのシグナルと思っています。

まだレポートできる段階ではありませんが、量子力学の“量子のからみとしめ腰ー引き腰の相関についての技法理論”は一つの例です。

“強い 弱い”、“勝った 負けた”、“上手い 下手…”の競技空手やガチンコ空手サイドから見れば“そんなナンセンス”と言われてしまうと思いますが、私は古流唐手の伝統を継承する一人として避けては通れない理論の構成と考えているのです。

なぜならば、古流唐手の思想である「自然との一体」と「霊肉一体の至上境」の超難解なステージを目指すためには、現代競技空手が掲げる歴史観や技法論理などをなぞっていても全く埒(らち)が明かれないと認識しているからです。

最近の稽古は「基技七構」、「武器の基振り」に時間をかけるようにしていますが、その狙いは基本を

支える縁の下である「基礎」の厚みを増していく事にあります。それは、地中に樹の根がしっかりと下ろしていけば、幹は強い風雨にも揺るがない大木と成長していく事につながると考えるからです。

又、並行して「空手の根(ルーツ)は剣術と相撲(角力/格技)にある(=刀+手)」との持論を押し進め、そして、いつもアンテナを張って稽古を実践しながら伝送回路に飛び込んでくる何かのシグナルを掴んでいきたいと思っています。

世間では、今後激動が起こるのでないかと囁かれているようですが、社会の動向(政治・経済・etc.)にも注視をしながら稽古修練に励んでいきましょう。(坂本)

古流へ結ぶ武器術

越谷道場 師範 山内 博

「受けては…ダメ。乗せるんだ。」

これは、講習会での先生の言葉で、場面は、相対での変手の稽古を行っている時でした。先生は、身体をガチガチに固めて、息を詰めた受けのかたちを見せてくれました。私はその姿をみて「あー」と、若い頃の自分の空手を思い出しました。



10代、20代と全力こそが空手であり、全身の筋肉を余すこと無く酷使していればこそ、いつか何かを掴むことが出来る唯一の方法だと本気で思っていました。

そんな時、先生が問いかけてきました。

「どんなに身体を鍛えても、刀(刃物)で来られたら?お前どうするんだ。」

絶句です。何も答えられませんでした。

それから、長い時間をかけて、先生は、武器術、導引術、古流形、変手、ナイハンチと形の再編成と、

空手をより広く、より深くと示しつつ来てくれ、現在も進行形です。

空手とは、いったい何なのか?

1996年・翁先生13回忌追悼演武に向けて、先輩と二人で棍対サイの組打ちを創作した時の事です。その時の留意点は、長物の棍に対しサイはどのように対応するのかでした。(下写真)

当時の考えは、サイは、遠間から棍の動きを捌きつつ、一気に間合いを詰めて懐に入ると云うもの

です。しかし、演武の映像を見ると、棍の初打ちに対して、まともにサイの打ちを合わせたり、あるいは、ガッチリ受けてから入り身に入るため、どうしても棍の初打ちを、意図的に弱くした演武になり不自然な内容になっていました。

「受けてはいけない。」

最近、熊本からの棍対武器術の映像をみると、どれも、添え手から、乗せるように左右の武器が連環して、棍を制しつつ、足の運びもとどまる事無く流れる様に変化しつつきている事を強く感じます。

そして、それこそが、そのまま古流の動きの本質だと思うのです。

そう、棍を真正面から受けるなんて出来るわけは無く、それは、近代格闘空手の、殴られたら殴り返す、と云う次元に龍精の空手はいないという事なのです。

なぜ、龍精は、多種多様の武器を稽古するのか？

空手の武器は、元をたどれば、当時の農具や、そこらにある棒きれであり、現在ある、サイ、トンファー、ヌンチャク、棍、杖、二節棍 etc.と云う洗練された形（かたち）は、武器としての意味も当然あるとしても、それ以上に古流の動きを学ぶための稽古道具と云う意味が多分にあるのでは？

だからこそ、翁先生は、武器は形に落とし込んで

稽古しなさいと云ったのでは？…形をより深く理解するために……。

琉球で生まれた空手は徒手空拳を根幹としているものの、対素手は想定せずに、当然のこととして対日本刀を想定していたのではないのでしょうか？

古（いにしえ）の琉球で、素手の身に危険が迫れば、その場の物を手に収め武器と相対する古流の動き。すべては、あくまで私の空想ですが、それ程見当違いでは無い気がします。

一度、始めた形は、真剣勝負でやり通す。

今の私は、三戦を行うときは、受け過ぎていないか、足が動き（噛み）はどうかを常にチェックをしながら稽古をしています。



裏山にあり、洞窟内には岩戸観音の名で知られる観音像が安置されています。

晩年の5年間を熊本で過ごした宮本武蔵が、この洞窟にこもって兵法書「五輪書」を著したことは、あまりにも有名です。

雲巖禅寺は、南北朝時代に日本に渡来した元の

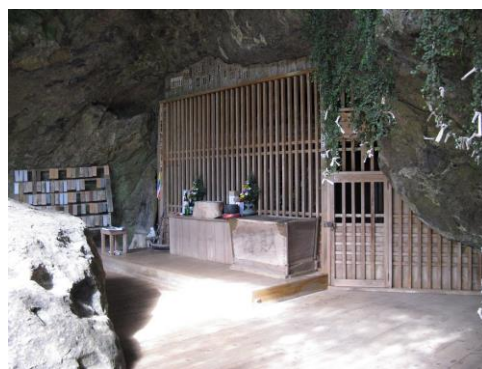
<霊巖洞>

熊本市の西方、金峰山山麓にある洞窟、霊巖洞。うっそうと茂る樹木におおわれ、神秘的な霊場として知られる雲巖禅寺の



この岩戸観音を平安時代の歌人・松垣も参拝しています。

雲巖禅寺（左）から霊巖洞に至る岩山を削った細道に、五百羅漢（右）が



禅僧・東陵永が建立したと伝えられる曹洞宗の寺。九州西国三十三観音第14番霊場としても知られています。岩戸観音の歴史は寺より古く、い伝えによれば、異国から観音像を運んでいるときに舟は転覆しましたが観音像だけは板のつて流れ着き霊巖洞に安置されたといわれています。



安置されています。この五百羅漢は、熊本の商人洲田屋儀平が、約200年前、24年の歳月をかけて奉納したと言われています。座る姿も表情もすべて違うたくさんの石仏は、見ている時間を忘れるほど興味深く、岩山にずらりと並んだ様子は神秘的な空気に満ちています。（旅紀行_福田 脩）



The Broken Telephone of Karate Transmission

—*Peter Giffen, Barrie Ryusei Canada Karate-Do*

Sometimes with my kids' karate class I'll have a games night and we'll play broken telephone. I'll whisper a message into the ear of one student, who will whisper to the ear of the next in the circle, who will whisper into the ear of the next, and so on.

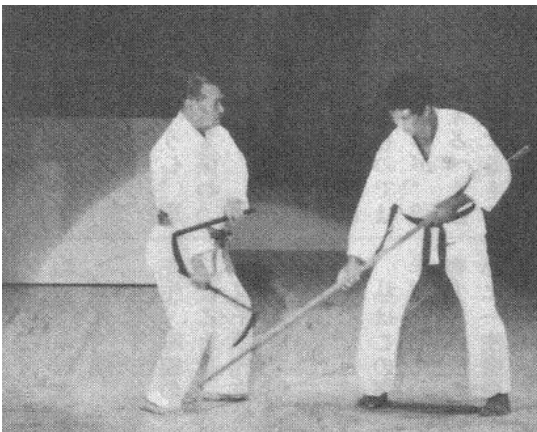


If I'm lucky my message—say, “the brown cow jumps over the fence”—might only be changed a little when it is said aloud by the last student: “The green frog hops on the road.” But sometimes the message is completely mangled: “My brother is full of snot.”

In some instances, the changes happen because students mishear the message. In other cases it's because young wags deliberately change the message to one they like better.

In many ways the transmission of karate from one generation to the next—teacher to student, teacher to student, in an endless cycle—is like broken telephone.

In some cases, the changed message is because talented practitioners such as Chitose Tsuyoshi-Sensei, founder of Chito-Ryu, and Sakamoto Ken-Sensei, founder of Ryusei Karate, change the kata deliberately.



As far as I understand, Chitose-Sensei changed some kata, distilling them to their essence. And Sakamoto-Sensei made changes to kata he practised in order to bring out qualities he found important, deepening their meaning.

In neither case did the karateka make their changes lightly. They both spent years mastering the conventional forms before they made deliberate changes to demonstrate their special insights. The situation is not analogous to tournaments in North America in the 1970s, when a yellow belt might demonstrate a form he had created

himself, complete with back flips, and perform it right after the half-time show of scantily clad go-go dancers (I'm not making this up). And he'd be scored well.

Then you have the many instructors who insist that they do the kata exactly as they were taught. I know they believe that, but can it possibly be true? They likely have different bodies than their teachers, different characters and different insights. Though they might do the same movements as their teachers, if they are advanced practitioners, they will bring their unique approach to the performance, so that there are differences on the inside—their understanding, body connection, explanations for the meanings of moves.

If you take this process over a number of generations, it's unlikely that a modern practitioner's performance would look anything like the founder's.

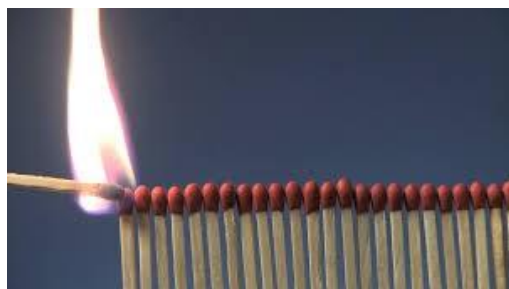
In some cases, the transmission might be broken because one generation's teacher didn't pass on vital information about the kata. This has sadly happened more than a few times, in a traditional Japanese

teaching approach in which the student is expected to perform a kata repeatedly until they understand its inner meaning. Sadly, this doesn't always happen, so valuable secrets are lost.

On the other hand, a truly talented practitioner can take a tired old form and breathe new life into it, with his or her insights derived from diligent practice.

I don't think broken telephone is a bad thing. Karate and its forms are a living martial art language, which must constantly undergo change so it doesn't become a dead language. I'd rather speak English or French or Japanese than Latin, because as frustrating as these languages can be with their exceptions and changing usage, they are living entities that are as exciting as the cultures where they are spoken. Latin is useful if you are a scholar and like to drink small glasses of sherry at awkward social functions.

At university I had a gifted professor who taught classes in buddhism and taoism. He would typically start a class meditating. Then he'd launch into a deeply insightful lecture which he would deliver without notes or hesitation. One class he questioned us about our conception of karma and rebirth.



What is reborn? He asked. It's obviously not our bodies. Our minds? Well, in this life we can become old or sick and lose our minds. So the mind isn't permanent. The same goes for our character. We may think our characters are unique but they can change under different circumstances. So what is reborn?

He asked us to picture a line of matches. You light the first one, and it lights the next, which lights the next . . . all the way down the line. The material in the first match is different from all the others. The flame is also changing all the time, burning different material.

So nothing is the same but there is a deep continuity and connection that runs through the existence of one match to the next. The same is true for the flame of karate transmission from one generation to the next, going into the future, which will be different than the past, but that doesn't matter, so long as the flame burns.

ささやき声で伝える伝言ゲームと空手の伝承

バレー 龍精カナダ 教士 ピーター ギッフェン

私は時々少年部のクラスで「**ブローケン テレフォン**」のゲームをして夜を過ごします。このゲームはあるメッセージを人から人へ耳元でささやきながら伝えていく伝言ゲームのことです

例えば、「茶色の牛が柵を飛び越える」のメッセージがどのような内容になって伝わるかです。運が良ければ同じ内容で伝わりますが、最後の生徒が声を出していった時、「緑のカエルが道を飛び跳ねる」と少し変わるかも知れません。しかし「私の兄弟は鼻水で

いっぱいです」と完全に混乱したメッセージになる時があります。

又場合によっては、聞き間違えあるいはひょうきん者が自分の好きな内容に意図的に変えることによってメッセージの変更が発生します。

ある世代から次の世代への空手の伝承は、多くの点で、先生から生徒－先生から生徒へと無限のサイクルで伝えられていきます。それは「ブローケン テレフォン」の伝言ゲームに似ています。

その中で、千唐流創始者の千歳強直先生や龍精空手

の坂本 健先生など、才能ある空手実践者が意図的に形を変え前者からのメッセージが変更されました。

私の知る限り、千歳先生はいくつかの形の本質を引き出して動作技法を変更しました。そして坂本先生は、自身が練習した形の資質を引き出して変更し、その意味を深めました。

しかしながら両者とも軽い気持ちで変更を加えてはいません。彼等は意図的な変更を加える前に、従来の形を深い洞察力を持って修得するまでに、長い年月をついやしたのです。

1970年代に開催された北米の空手大会で、一人の黄帯の選手が自分で創作したアクロバット空手型を演じて良い得点を出したことがあります。私はそれを受け入れることはできませんし全く理解不能です。

それから、生徒たちに教えられたとおりに形を行うことを主張する多くのインストラクターがいます。私は彼等がそれを信じていることを知っていますが、果たしてそれは真実でしょうか？

生徒達は先生とは違う体型、異なるキャラクターそして異なる洞察力を持っています。彼等が初・中級段階では先生と同じ動きをするかもしれませんが、もし上級のレベルに進んだならば独自のパフォーマンスでアプローチをするようになるのです。

このプロセスが何世代にもわたって行なわれた場合、今の指導者のパフォーマンスが創設者のパフォーマンスと同じように見える可能性はほとんどありません。

場合によっては、ある世代の先生が型に関する重要な情報を伝えなかったために伝承が途絶えることがあります。伝統的な日本の教授法では、生徒はその内面の意味を理解するまで型を繰り返し練習することを期待されます。しかし 悲しいことに、それが常態化するとは限らないため貴重な形技法が失われてしまうのです。

一方、真に才能のある指導者は、勤勉な実践から得られた洞察力で古い形の本質を引き出し、そこに新しい息吹を吹き込むことができます。

私はブローケン テレフォンが悪い考えではないと思います。空手とその形体系は生きた武道の言語で

あり、死語にならないように絶えず変化しなければなりません。

私はラテン語よりも英語、フランス語、日本語を話したいと思います。なぜならば、話されている文化と同じくらいエキサイティングな生き物だからです。ラテンの言語は、例外や使用法の変化を除けばイライラする可能性があります。ラテン語は、学者が集まる厄介な社交行事の宴席で、小さなグラスでシェリー酒の飲むのが好きな場合に役立ちます。

大学で仏教と道教の授業を教えてくれた才能のある教授がいました。彼の通常のクラスは瞑想から始め、次に深く洞察に満ちた講義へ進みます。あるクラスでは、教授は私たちにカルマと再生の概念について質問しました。

何が生まれ変わるのか、と彼は尋ねました。それは明らかに私たちの体ではありません。私たちの心？ さて、この人生では、私たちは年をとり、時には病気になるたりして心を失う可能性があります。ですから、心(精神)は永続的ではありません。

同じことが私たちのキャラクターにも当てはまります。私たちのキャラクターはユニークだと思かもしれませんが、状況によって変わる可能性があります。では、何が生まれ変わるのでしょうか？

教授は私たちにマッチのラインを描くようにと言いました。そして…… あなたは最初のものを点ける…それは次のものを点け…次を点け…そして ずっと先へと。最初の素材は他のすべてとは異なります。炎も常に変化しており、さまざまな物質を燃やしています。

したがって同じものはありませんが、ある一致から次の一致への存在を介して実行される間には、深い継続性と接続があります。ある世代から次の世代へ、そして未来へと伝わる空手の炎についても同じことがいえます。それは過去とは異なりますが、炎が燃えている限り問題ではありません。(訳_坂本)



中心をとるとは

宗運道場 四段師範代 甲斐 隆

技を掛けたとき上手くいかないのには幾つかの原因があります。その原因の理由は一つや二つではなく、沢山あるはずと思われます。ただ本人が気づいていないだけなのです。だから、技をマスターすることは難しいものであると考えます。自分で技が上手くできるために重要なことの一つに「中心をとる」があります。それには、自分の中心をとることと相手の中心をとることがあります。今回は、この事を述べさせていただきます。

自分の中心

まず、自分の中心をとらなければならない。つまり立った姿が、天と地と繋がって宇宙の中心にならなければならないということ、しっかりとした縦の軸をつくる必要があります。

頭と背骨と仙骨が一本の軸となって天と地に繋がるよう意識することです。初心者ではこの軸がゆがんだり、傾いたり、ひ弱かったりするので、力が出せず、迅速に動けずに技も上手く掛からないこととなります。これに関連して、技が上手くいかないもう一つの大きな原因は、縦軸がしっかりしていない内に、横に体や手足を動かしてしまうことです。

かなり無駄な動きをしている事で、軸がずれて自分の中心が取れていないとスムーズに動けずに入身（相手の死角に身を入れる）が難しい。中心がしっかりしていれば、太刀や短刀に対する捌きでも自由に入身できるようになるはずで



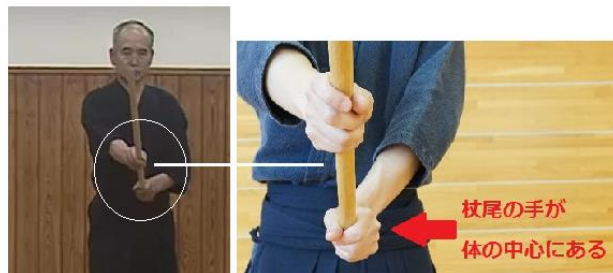
中心からの発出が重要



相手の攻撃を逃がせず真面に受けた場面

相手との中心

また、相手の中心に自分の身を置かなければ、相手と結ばず、自分が自在に動くことも、相手を自由に動かすことも難しい。この古流唐手を学ぶ上で大事な要素で、自分の中心に相手を捉え、相手の中心に



－ 杖・右常の構え －

自分の身を置くことによって、相手と結んで一体となれるので、技が上手く掛かると思うのです。

「中心をとる」には、力を自分の中心に集めるという意味もあります。技を掛けるのに、遣う手は体の中心である三腰と結び、体の中心にある線上になければなりません。手がこの中心線を少しでも横にずれば力は半減してしまうので、相手に返されてしまうことにもなるのです。

片手取りなどで相手につかませるために手を出す場合も、出す手はやはり相手の中心線に出さなければならない。また、投げなどで切り下ろして投げるときも、手は中心線を下ろさなければならない。これが少しでも中心から横にずれてしまえば緩みができ、結びが切れてしまうので相手を生き返らせてしまい、 $1 + 1 = 2$ になって返されてしまいます。

心理的・精神的作用

「中心をとる」には、目に見えない、心理的、精神的な意味合いもあるかと思います。人間は一人一人皆、外観も考えも違うのですが、ずっと深いところでは皆が同じものをもって



相手と中心を結んだ杖の見え方

おり、そこでは、皆は繋がっていると云われます。稽古の心構えとして、その人類共通で繋がっているものに働きかけなければならないように思えます。これは西洋の文学の大方は人間中心主義という人間の心の中の事ばかりに焦点を置いており息苦しさを感ずるとして文学者の宮沢賢治は西洋文明に毒されない、自然と人間が一体になっているところに命と感激があるとのことに気づき、空にも大地に海にも風にも全てのものに幸いが訪れないと幸せと呼ばないと説いている事に共感しました。目に見える表面的なものだけを追いかけるのではなく、人間の心の中にある、深いところ

にある万物共通の中心も捉えつつ、修行に励まなければならぬということでもあると考えます。

中心を取れるようになれば、ビジネスでも日常生活でも、中心を掴むことができるようになるのではないかと思います。表面的なことに惑わされること

なく、末端の些細なことに空回りさせられることもなく、最適な判断や処理が最短距離で無駄なくできるはずで。

まずは、古流唐手の稽古で「中心をとる」稽古を修練し、剛柔合気の体とその精神をつくらなければならないだろうと思います。

球の原理からの考察

宗運道場 四段 福田 脩

講道館柔道の三船十段は柔道の根本を象徴するものは球であると説いています

『球は倒れないし、いくら転んでも中心を失う事がない！

球は動きそのものに無理が無く変化も極めて速い！

また球は無抵抗であり、相手の攻撃に対しては無限の力を備えている。

まさに球の原理は“引かば押せ 押せば引け”という古くから武道の極意として言われた言葉そのものである。』



人間は修練によっては変幻自在あらゆる変化に対応できる身体の構造を持っており進歩は無限であり球の境地になり得ると言っておられます。これは唐手でも同じ事が言えます。

球は立体です



腰全体を球と考えてみると、球の中心を軸にして前後腰と左右腰があり、その中心(重心)をキープして移動するとなると・・・

つまり球が転がるのが上下腰になるのではないかと。と思います。

上下腰で落ちてはいるのだけれども、移動するためには永遠に落ち続けなければならない。

その移動の球の原理は柔道も空手もあらゆる武道であれば同じなのではないかと思います。

球が転がる様に移動して上半身の球と脚の球の三つの球を総合して一つの球とし古流唐手となると思います。

上半身の球は上丹田を中心とした螺旋手で脚の球は結び立ちを中心とした歩法の球です。

よく歩法は転がる様にと言いますがまさにそれだと思います。

稽古とは教えられるだけではなく、自分で何かに気付かなければなりません。習っているからと、ただ頷いているだけでは進歩は無いのです。

そこで何かに気付いて何かを返さなければ身に付く稽古にならないのではないかと私は思っています。

動きだけではなく、その根本である技を見る事。そしてその技を見るために日々の修練を積む事。そして稽古の時に自分なりの気付きをぶつけてみる事。ぶつけるのは凄勇気がいりますが・・・

そしてその気付きを修正してもらうための耳をもつ事。それらを心掛けながらこれからも稽古を続けていきます。

近況で得た諸々の気付き

宗雲道場付き 加地龍太

野生動物の動きは、「起こり」が見えません。一級品の武芸者も同じく、動きの初めが見え難く尚かつ素早く動くので気が付いたら打撃の連撃を喰らっているということになります。

人間の動きをどれだけ野生に近づけるかが武術・格闘技の一つの目的かと感じます。

今月から私は天真正自源流兵法尚武館に入門させて頂き、自源流を空手と併行して修行しております。

自源流の剣術を鍛え抜いている修行歴の長い人々の太刀捌きは実に見事であり、離れて見ても体の動作の起こりがほとんど見えないという感覚です。

相対して向かい合う形で刀を抜かれて振られると正直恐怖を感じる程です。

私は今まで競技の空手で組手を何度もやってきましたし、柔道でも総合格闘技でも乱取りやスパーリングの形で他者と一対一で向かい合って技と体をぶつけ合う経験は体験してきました。

その中で、自分よりも遥かに強い相手と闘ったこともあります。

当然勝負には負けるのですが、素手の相手の場合は自分より遥かに強くても恐怖を感じるということは余りありませんでした。

しかし、自源流現最高師範の上野景範先生の太刀を試斬用の畳表越しに正面から相対して見たときは、恐怖を感じました。

斬られたのは畳表ですが、私はそのすぐ後ろに立っていたので自分に向かって太刀が振られたような錯覚になりました。

そのとき、上野先生の動きの起こりと太刀筋は正確には見えませんでした。

自源流は神速の剣を唱えています、あれが正に神速というものなのかと感じました。

素手での打撃もそうですが、動きの起こりが小さく且つ素早い人と正面から相対すると相手が何をしたか分からない間に攻撃を受けているということになります。

腰を使って突きを打つとき、まずは腰を大きく動か

してその動きに手を乗せて突く反復をしたいと思います。それが慣れてくると腰の動きが徐々に小さくなり、最後には腰が動いたか否か見えなくなっていると新里勝彦先生の御主張をHP上で拝読しました。素手の武術も武器を使った武術も、身体操作の根本が腰であり、この力をいかに四肢に伝えるかが重要なのだと感じます。空手の武器術の棍でもそうです。

私は入門の仕立てで詳しいことはまだ分かりませんが、自源流の剣術もやはり腰の回転が要になってくるのではないかと推測しています。

腰の横回転と刀の縦回転が合わさる所が素早い太刀筋を生む軌道だと源武に書いてあったことをこの推測の根拠としています。

自源流の基礎修行の打ち廻しを3月上旬から毎日最低合計1000回やっています。最近は一日合計2000回をやるようになりました。

毎日やって気付きがあり、腕で振るのではなく体幹で振る意識をして振ったときは打ち棒が軽く感じる体感をしています。

六尺棒でも正しく触れているとあまり重さを感じずに振れる感覚になったことが何度ありましたので、得物の長さや得物の持ち方が異なるだけで根本的には体幹の腰の力を四肢に伝えて武器を扱うのが基本なのだと感じます。

自源流の技法とトウディはどちらも非常に難しい技術ですが、生涯を掛けて目指す価値のあるものだと直感しておりますので、体の過剰酷使で病にならぬよう気を遣いながら修行を続けていきます。



— 私が初めて斬った畳表 —

昇段 (令和三年度 冬期) / Dan Grading (2021 Winter time)

四段師範代
【Yon-dan Shihandai】

参段指導員
【San-dan Shidojin】

貳段指導員 【Ni-dan Jun-Shidojin】



Romany McGuffog
ローマニー マッグフオッグ
Australia



Jessica Patman
ジェシカ パットマン
Australia



Georgia Dearlove
ジョージア デーラブ
Australia



Mark Johnstone
マーキー ジョンストン
Australia

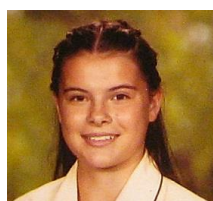


Christopher Thompson
クリストファー トンプソン
Australia

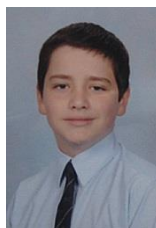
【初段 Sho dan】



Cameron Buick
キャメロン ビューイック
Australia



Michellie Thompson
ミシャリー トンプソン
Australia



Jacob Cobner
ジェイコブ コブナー
Australia



Dylan Kennedy
デイルン ケネディ
Australia



Kirk Pitzner
カーク ピッツナー
Australia

【初段 Sho dan】



Chris Bosworth
クリス ボスワース
Australia



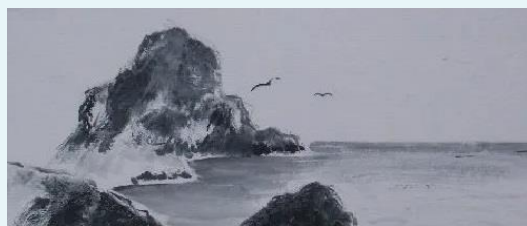
Jane Davenport
ジェイン タベンポート
Australia



Rohan Gladman
ローアン グラッドマン
Australia



Adam Salzman
アダム サルズマン
Australia

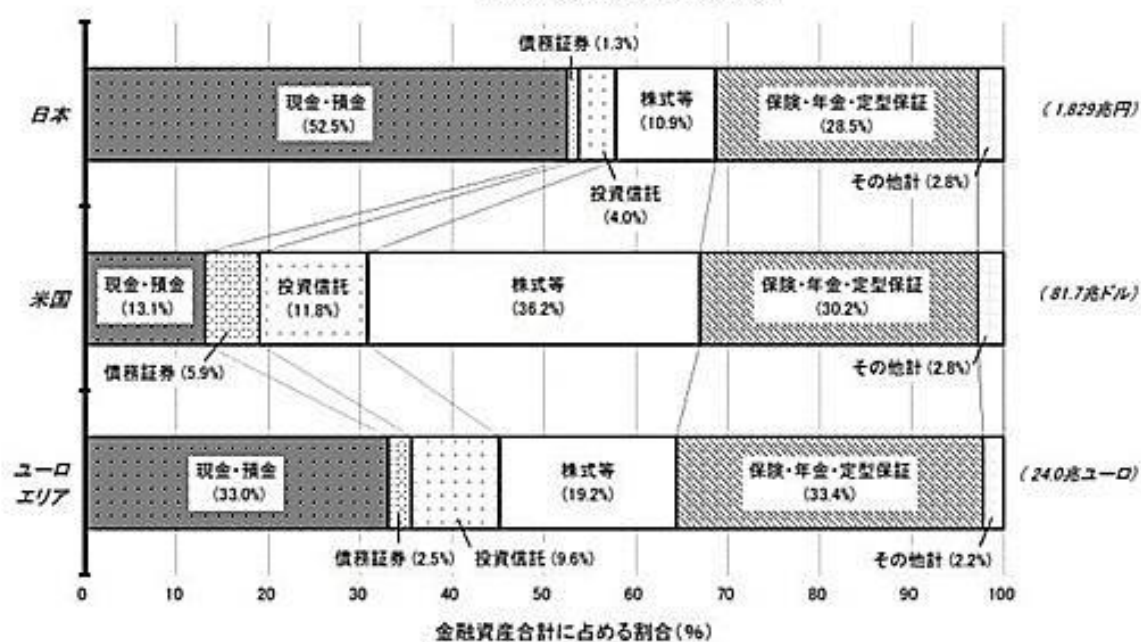


日本における投資教育

宗運道場 弐段 西坂 毅

最近のデータによると、日本人の個人資産（タンス預金）総額が 100 兆円を超え、また、預貯金の資産の総額は 955 兆円あるそうです。日本の株式市場の時価総額は約 736 兆円（令和3年3月24日現在）です。日本人の持つ資産の総額が日本の株式市場の時価総額をはるかに上回っていることは明らかです。これだけの資産が眠っていることは非常に問題だと私は思います。これだけの資産があれば、もっと日本社会が潤ってもおかしくないと思いますが、実際のところ日本経済は停滞、または低下し続けています。なぜでしょうか？

家計の金融資産構成



*「その他計」は、金融資産合計から、「現金・預金」、「債券証券」、「投資信託」、「株式等」、「保険・年金・定型保証」を控除した残差。

引用：日本銀行統計局「資金循環の日米欧比較（2018年8月14日）」

日本人とアメリカ人の家計の調査を行ったところアメリカ人は資産の 13.1%を現金・預金に 48%を投資に回しています。日本人は資産の 52.5%を現金・預金に 14.9%を投資に回しています。日本人の多くが投資＝ギャンブルと認識している方が多いし、投資の話をするとお金に汚い人間とイメージをしている方が多いと思います。また、預貯金が一番安全な資産だと考えている方が多いと思います。日本政府はインフレ率を年 2%としています。この場合、今年 100 円で買ったものが来年には 102 円出さないと同じものが買えません。言い換えると今年 100 万円の預貯金は来年には 98 万円の価値に目減りしてしまうのです。バブル全盛期なら銀行の金利が 7~8%ありましたから余裕でインフレ率をカバーできていましたが、今の銀行の金利は 0.001%ですからインフレ率をカバーできていないので預貯金は安全ではないのです。日本政府は何もしていないわけではなく、『iDeCo (イデコ)、NISA (ニーサ)、つみたて NISA』など投資に興味がある方は聞いたことがあると思いますが、これらの政策を打ち出し、投資における税制優遇制度を行っています。日本人はなぜ投資をしないのか？

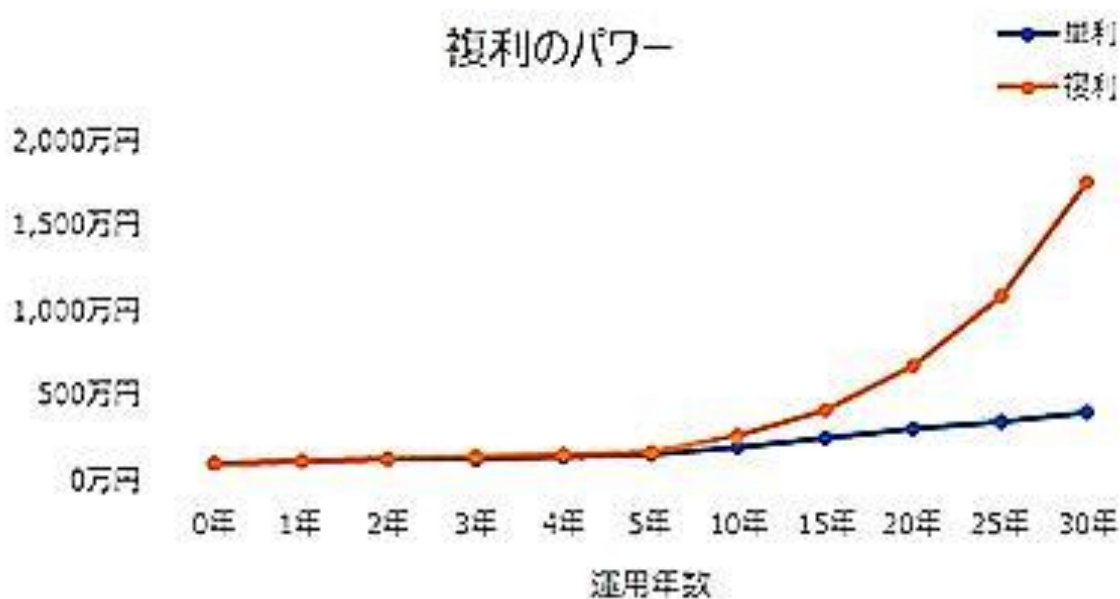
税制優遇制度の意味が理解しづらいのも原因があると思いますが、日本人は、小さいころから働いて稼ぐという、労働の対価としてお金を得る手段しか、教育を受けてきていないからだと思えます。

また、お金に働いてもらい（投資）お金を得るという、20世紀の発見であるアルベルト・アインシュタインの「複利の力」の教育を受けていません。

例えば、元金が100万円を年利10%で複利運用すると（税金は控除しないとする）

10年で2,593,742円。 20年で6,727,500円。 30年で17,449,402円。 40年で45,259,256円。

50年で117,390,853円になります。



運用資金100万円 年利10%における単利・複利の違い

100万円が50年で約1億1700万円になるのです。投資を始めるのが早いほど資産が多く増えることがお分かりいただけたのではないのでしょうか。

年金の掛け金の支払期間が40年ですのでその期間運用したとすると4500万円ほどになります。

去年問題となった老後の年金の不足金額が2000万円と言われていましたから、不足額を十分にまかないお釣りがくる計算になります。

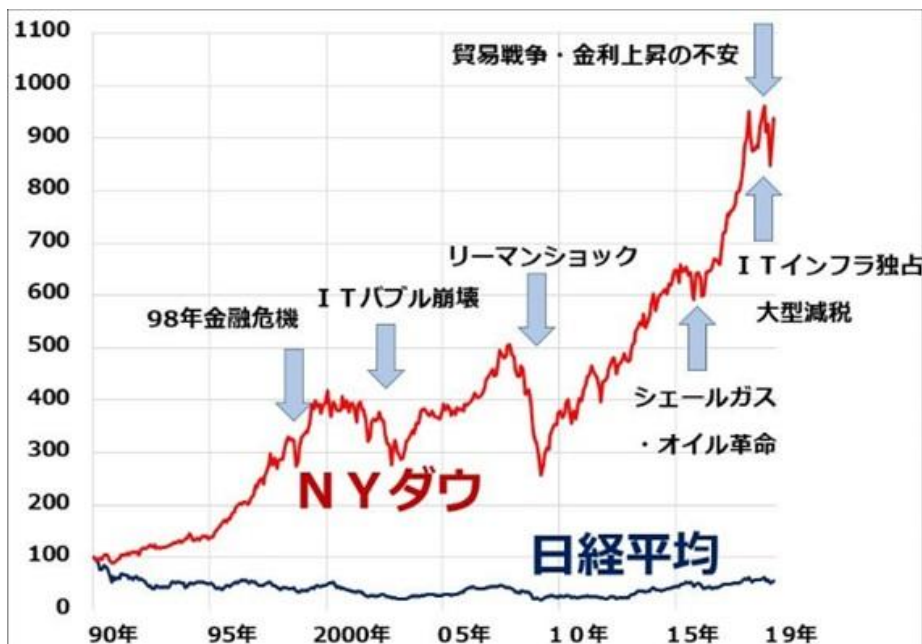
最近、アメリカではコロナの給付金として1400\$（約15万円）の給付金の支給が決定されました。ある調査ではこの給付金を投資に回すと回答した人たちは全世代で40%に上っています。投資意欲の高さがうかがえます。

まさに景気刺激策として給付金が活用されています。

下の図は1990年から日経平均株価とNYダウの上昇率を比較したものです。アメリカ株が投資対象として魅力的なものだと読み取れます。

日本ではどうでしょうか給付金をもらっても同じように投資に回す人たちは10%もいないのではないのでしょうか。やはりほとんどは預貯金として資金が眠ってしまうのではないのでしょうか。

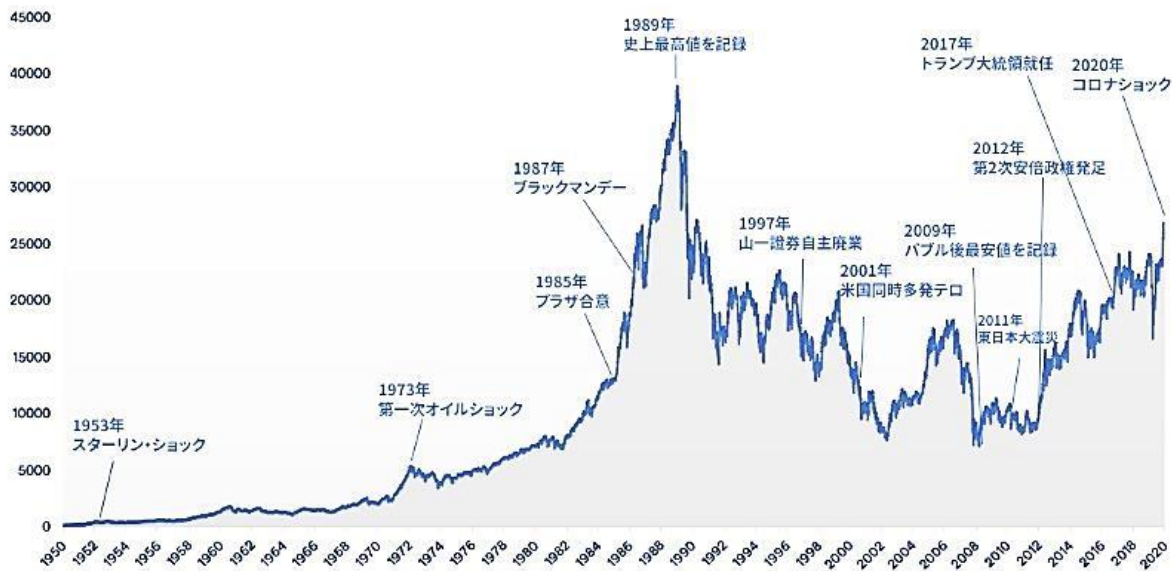
今の学校教育では投資教育は行われていません。



国際的な世界には英語教育も大事でしょう、今からの労働者不足にとってプログラミング教育を大事でしょう。日本経済を回していくためには投資教育はもっと大事だと私は思います。金の流れは経済の血液みたいなものです。流れが止まってしまうと人間と同じように病気になってしまいます。眠った金が経済をむしばんでいるのは今の日本経済を見れば歴然です。日本経済の再建にはこの眠った金を活用することが

必要だと私は考えます。眠った金が循環し、日本に投資すれば、社会が潤う、社会が潤えば会社が潤う、会社が潤えば社員が潤う、国民の生活が潤い、デフレスパイラルから抜け出すことができると思います。めぐりめぐって税金が上がり、日本国は本来の姿を取り戻すことができる実力があると私は確信しているからです。

日経平均の歴史



今の時代 100 円と少額から投資ができます。昔に比べてハードルはかなり下がったのではないのでしょうか？株式の手数料もかなり安くなっています。ネット証券会社では手数料無料で投資ができます。なかでも少額から始められる積み立て投資を私は推奨しています。皆様が、今からでも投資を始めてお金の不安から解消されることを望みます。稚拙な投稿を最後まで読んでいただきありがとうございました。



< 鑪水（たたらみず） >

熊本市河内中学校の真北にイチョウの老木が

みす。昔から地元の人たちの生活の水として使われ、有明海でとれた魚を売る人たちが、冷たい水を氷代わりに利用したといわれています。

そそり立っています。この樹齢 600 年以上という木の根元付近にぽっかり開いた穴から尽きることなく湧き出ているのが鑪水です。

「たたら」とは日本古来の製鉄法のこと。その昔、製鉄に使われた水であることがうかがい知れます。河内町には、水を流し砂から砂鉄を分離する砂鉄水路跡（市指定史跡）があり、鉄の物語に想像がふくら



< 天社さんの楠 >

熊本市の北部を源流とする井芹川と坪井川が独鈷山（118m）の西で合流する手前北側に地元では「天社さん」と呼ばれる高橋東神社があります。この神社の祭神は道君首名（みちのきみおびとな）で、その御神木として崇められているのが「天社さんの楠」です。この楠は幹回り 11.9m、高さ 17.5m、樹齢 1300 年以上と推定され地域のシンボルとして親しまれています。（旅紀行__福田 脩）

 <p>和</p>		<p>龍精空手道季刊誌 龍手/Ryushu http://www.ryusei-karate.com/</p>	 <p>忍</p>
--	---	---	--